



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	時間区分にかんするエッセー：1921年3月行動について
Author(s)	上杉, 重二郎
Citation	北海道大學教育學部紀要, 22, 13-18
Issue Date	1973-11
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29084
Type	departmental bulletin paper
File Information	22_P13-18.pdf



時代区分にかんするエッセー

— 1921年3月行動について —

上杉重二郎

Essai über die Periodiodisierung

— in Bezug auf die Märzaktion 1921 —

Jujiro UESUGI

1

ウラジミール・イリイチ・ウリヤノフは、1921年8月14日付の『ドイツ共産主義者への手紙』のなかで、「……古いドイツの社会民主党のひより見主義にたいする憎悪……は、彼ら〔被抑圧、被搾取大衆〕を時期尚早の諸蜂起へおしやった。……だからこそドイツの革命的労働運動の発展は、1918年の終り以来、とくに困難な道をたどった」¹⁾と書いている。

この困難については、1932年2月にも、たとえば当時ドイツ共産党書記長であったエルンスト・テールマンが、「なぜドイツではストライキが少ないのか」と問い、みずから答えて「プロレタリアートの抵抗に対して資本家的国家機構のあらゆる権力手段を用いる、尖鋭化した企業家の攻勢」と並んで、企業内における改良主義、ドイツ労働組合総連合 [ADGB] の依然として強い大衆への影響力」²⁾を、すなわちドイツにおける右翼ひより見主義の根強い存在を、この困難の重要な理由の一つに挙げている。

労働運動のなかの資本家階級の代理人によって、労働者諸組織が直接に分裂させられ、また彼らが振りまくブルジョア的思想に大衆が汚染されることによって、労働者およびその組織の戦闘力が奪われ、あるいは歪んだ方向に向けられる。このような状態の下において、真に革命的な戦闘的労働者党の成立が妨げられ、またそれが誕生した後といえども、大衆的影響力を持つことが、恐しく困難となる。

この状況はひとりドイツにおいてのみ見られるところではない。むしろあまねく帝国主義段階にある資本主義諸国家において見出される^{2a)}。

けれども長い伝統を持ち、かつ世界においてもっとも強力な社会民主主義党といえ、ドイツ社会民主党にはかならないのであって、まさにその存在のゆえに、まさにこの党とドイツ

1) レーニン、全集、第32巻、552ページ。

2) Thälmann, Ernst, Der revolutionäre Ausweg, Berlin 1932, S. 51 f., zit. in: Kuczynski, Jürgen, Die geschichte der Lage der Arbeiter unter dem Kapitalismus, Band 5, S. 245.

2a) ちなみに日本における共産党の創立は1922年であり、その当時は有力な社会民主主義政党は存在せず、その成立は1922年以降のことであるとして、わが国における社会民主主義的改良主義的政党と共産主義政党との発生の順序が、ヨーロッパ資本主義諸国とはまったく逆になっていると指摘する論者があるが、この所論は事実と合致しない浅薄なものである。しかしこの論議は本論から外れるので、これ以上は言及しない。

軍国主義者—帝国主義者との密接な結託のゆえに、ドイツにおける共産主義運動はつねに固い壁にぶつかり、レーニンさえある時期には期待したような、比較的直線的な革命運動、労働運動の発展は、1918年11月革命に続く「戦後危機期」Die Periode der Nachkriegskriseにおいても、見ることはできなかった。

2

1789年7月14日バステュー牢獄の奪取に始まるフランス革命は、フランス人はこれをただあっさりフランス革命 la Revolution française と称するのが常のようだが、われわれはフランス大革命と言っている。しかしこれは理由のないことではない。なぜならば、この革命はヨーロッパ大陸諸国民に直接的な影響を及ぼし、それらの国々における封建的領主制、絶対主義的王制変革の、ほとんど起動力とも言い得べき力となったからであり、しかも当時ヨーロッパこそは、たといわれわれが Europazentralismus ヨーロッパ中心思想を懐かぬにしても、まさに世界であり、ヨーロッパ史は世界史であったからである³⁾。

これに反して日本の歴史家たちがロシア10月革命とのみ称するのに対して、ロシア人自身は1917年11月（グレゴリウス暦）の革命を大社会主義10月革命 Великая Октябрьская Социалистическая революция と正しく呼ぶ。なぜ Великий か。第1にはその影響するところたんにヨーロッパ大陸にとどまらず、アメリカ、アジアなど他の諸大陸にも決定的な作用を及ぼし、文字どおり世界の革命であった。第2にはそれまでのあらゆる革命が、たとえばブルジョア民主主義革命がたしかにそれまでの支配者、封建領主、絶対主義的君主を完全に、ないしは未完の形で打倒したが、すべての抑圧と搾取とを揚棄せず、あらたな階級的支配を生み出した。これに対して大社会主義10月革命は理論的にあらゆる階級および階級支配を止揚すべきものであるのみならず、その実践において明確に階級廃棄の方向に進み、これをその後の50余年の歴史において実証しつつある。

第3に、この10月革命によって、Allgemeine Krise des Kapitalismus 資本主義の全般的危機という全く新しい世界史的時期が創り出された。現にわれわれもそのなかにいるこの時期は、別の言葉でいえば、革命と戦争の時期である。

3

この全般的危機の時代は、すでに半世紀以上の歳月をけみしたので、歴史家はこれをさらにいくつかの時期 Periode に区分けて、それぞれの時期の特色を浮び上げらせねばならぬ⁴⁾。

3) Engelberg, Ernst, Zur methodologischen Problemen der Periodisierung. „Zeitschrift für Geschichtswissenschaft“, XIX. Jg. 10/1971, S. 1291.

4) 時代区分の方法論的問題については、Engelberg, a. a. O. が正面から取りあげている。この問題はきわめて理論的であると同時に、すぐれて実践的な課題となっている。Prof. Dr. Engelberg がこの包括的問題をこの論文のなかですべて解明したとはいいがたいけれども、たしかに理論的イムパクトに富む試行と言いうる。

5) たとえば石川浩は「戦後恐慌期 (1919~1923年)」という言葉を使っている。石川浩、戦後恐慌期における労働者政府の問題、宮崎大学学芸学部紀要 第17号、1964年。たしかに1920年に経済恐慌がおきたが、問題はここでは循環的経済恐慌ではなくて、資本主義の体制的危機であるし、1920年の経済恐慌が1923年まで続きはしなかったの、この表現は適当ではない。

通常この時代は

1. 戦後危機期⁵⁾, 1918~1923 年。
2. 資本主義の相対的安定期, 1923~1929 年。
3. 世界経済恐慌期, 1929~1932 年。
4. ファシズムと第2次世界戦争の時期, 1933~1945 年。
5. ドイツおよび日本の帝国主義＝軍国主義敗北以降の時期については、別に考えたいので、いまここでは論じない。

ところで、いまとくに問題にしようとするのは、「戦後危機期」である。1918 年ないし 1923 年秋にいたる期間を、まったくべったりと一つの Periode と見做しうるかどうか。なぜこのことがとりわけここにとり上げられねばならぬか、といえ、それが 1921 年 3 月、すなわちこの時期のちょうど中間にドイツで起きた 3 月行動 Märzaktion の評価と直接にかかわりあってくるからである。

現在 3 月行動について具体的に述べる暇がないので、しかるべき文献の参照をお願いしたい⁶⁾。ところで、ここではまずエンゲルベルク教授の時期区分にかんする主張にちょっと触れておこう。

「すべてこれらの諸理由から、時期の区切りをつけるに当って、われわれはかかる顕著な諸事件——主として実際は諸事実の総和〔圈点は E. E.〕——を考慮せねばならぬであろう。この顕著な諸事件とは、諸階級および階級内の諸部分⁷⁾ 相互間の、ないしはそれらの国家に対する関係ならびに力関係、さらには諸国家、諸国民間の関係ならびに力関係を表現しているものである……。」⁸⁾

ここで注意を喚起したいのは、「諸事実の総和」という言葉である。すなわち時期の区切り Periodisierungseinschnitt とは、いわば時の流れに einschneiden 切れ目を入れることではあるけれども、肝心なことは、切れ目と切れ目との間に包括された「諸事実の総和」が、一つの質を示しているということではないか。

4

3 月行動はただに戦後危機期における重要な事件であるにとどまらず、じつにドイツ労働運動史上の注目すべきアクションである。1914 年 8 月 1 日ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世はロシア帝国に対して宣戦を布告した。8 月 4 日にはドイツ社会民主党が戦時国債を承認し、「祖国擁護」の態度を具体的に示した。他の参戦諸国の社会民主主義者も、ボルシェヴィキまたその後レーニンを中心に結集した少数のツィムメルワルト派を除いて、それぞれ「自国の」帝国主義政府を支持するにいたったことは、よく知られている。レーニンは 1915 年 5 月ないし 6 月に『第二インターナショナルの崩壊』を書き、すでに第三インターナショナルの創立を目指した⁹⁾。

6) 十分な資料の裏付けによって集団的討究の結果として書かれた Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung, Hrsg. vom Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Bd. III, Dietz Verlag Berlin 1966 が推薦しうる。日本におけるドイツ史の文献は、日本人によって書かれたものも、翻訳もまずおしなべて反マルクス主義的立場に立って書かれている。ここではわずかに上杉重二郎、『ドイツ革命運動史』二巻、青木書店、1969 年を挙げることが許される。

7) Klassenfraktionen, この訳はあまり適当ではないが、要するに Fraktion は本来のドイツ語で言えば、Bruch 破片であるので、分派ないし派閥とは訳さなかった。

8) Engelberg, E., a. a. O., S. 1225.

9) レーニン、全集、第 21 巻、『第二インターナショナルの崩壊』参照。

1918年12月末カール・リープクネヒト、ロザ・ルクセムブルクらによって、長いための後であったが、ドイツ共産党(スバルタクス団)が設立された。これによってドイツはドイツ社会民主党、ドイツ独立社会民主党、ドイツ共産党の三つの労働者党を持つことになった。この「分裂」を避けようというのが、スバルタクス団の指導者たちのための理由であった。

けれども軍国主義者＝帝国主義者と結びついた社会民主主義者とマルクス＝レーニン主義者とが一つの党のなかに共存することは、理論的、実践的にありえないことであった。すなわちこの分裂はたんに外見的「分裂」にすぎず、将来において労働者階級の利益を完全を守るべき一つの統一的労働者党をつくるための端緒にはかならなかった。「分裂」は労働者運動統一の礎石をおいた。そのことは、1946年4月ベルリンにおけるドイツ共産党とドイツ社会民主党との、マルクス＝レーニン主義の土台の上に立った合同という事実によって証明された。

5

リープクネヒトとルクセムブルクとは、1919年1月早くも反革命の手によって無惨にも殺害された。しかし労働者組織、労働者運動の統一という方向は、彼らの後継者によって終始基本的に追求され続けた。

1921年3月行動は、この方向に対してどのような意味を持ったか。この行動は一言で言えば、準備不足の闘争であり、まさにウリヤーノフが指摘したように「時期尚早」であった。そのため党および労働者大衆は重大な損害を蒙った。3月行動をいかに評価し、その教訓をいかに汲みとるか、それは同年6月～7月モスクワで開かれた第三インタナショナル第三回大会における、そしてまた極めて当然のことながら、8月下旬イエナに開催されたドイツ共産党第7回大会における、もっとも主要なテーマとなった。

その恐しく自由活潑かつときには激烈な討論の内容にここで詳しく立ち入れないのは、残念であるが、時代区分にかかわってのみ言えば、問題はつぎの点にある。モスクワにおいても、イエナにおいても、確認された事実、なによりも3月行動が直接的にはプロイセン総督、社会民主党の幹部オト・ヘールジンクの挑発によっておこされたものであったことである。しかし当時ドイツ共産党は強く「攻勢理論」^{9a)}を唱えていたが、戦後危機が果してそのまま連続しており、1921年初頭において労働者階級が攻勢に出るべき状況にあったかどうか、という点が、論議の焦点になった。

繰り返して言えば、もしこの1921年になる年が、戦後危機期のさなかにあったとするならば、すなわち1921年はなんらかの「切れ目」を示すものではなく、資本主義体制が経済的にも政治的にも依然として1918年以来の危機期のなかにあったと考えねばならない、とすれば、やや単純かつ図式的になるけれども、この危機的情況の下において共産党が政府打倒を目指して攻勢に出ようとすることは、当然理解できることである。

これに対して3月行動を「バクーニ主義的な狂気」¹⁰⁾と断じたパウル・レヴィは、情勢をつぎのように判断している。

「……経済的崩壊は深まっているにもかかわらず、ドイツ資本家階級は鞏固になり、

9a) OffensivtheorieあるいはOffensivphilosophieとも言われ、モスクワの大会では両者はその意味が異なっているとされた。そして共産党が資本主義国家にあってはつねにoffensivであるのは当然だ、とも主張された。

10) Levi, Paul, unser Weg. Berlin 1921, S. 3.

……ドイツにおけるブルジョアジーの支配は——政治的な意味では——もはやなんら深刻な動揺を経験しなかった。……」¹¹⁾

しかも彼がくり返し強調していることは、ドイツ共産党はプロレタリアートのなかでは少数にすぎず¹²⁾、大衆が社会民主党の影響下にあつて、経済的窮乏のゆえにかれらの不満は増大しているものの、「ますます諦めの気持」¹³⁾のなかにあるとき、「国家権力を奪取するための、蜂起を組織する前提は、当時まったく存在しなかった」¹⁴⁾という事実であり、したがって共産党の行動は時期の変移を考慮しないアナーキスティクなものであったという断定である。

コミンテルン第三回大会でトロツキーがいちじるしく右翼的態度を取ったことは、興味なしとしない。すなわち彼はつぎのように政治情勢をきめて否定的、悲観的にとらえた。

「……戦後第3年は終りに近づいているが、きわめて重要な政治、経済現象が生じた。資本は依然としてほとんど全世界において玉座の上に坐っている。そしてわれわれは、世界革命を目指すわれわれの態度がいまなお正しいかどうかについて、検討しなければならない。否定できぬ力関係の変化が生じた。この変化が力関係の深部における変位に基づいているのか、それともむしろ表面的な性質を持ったものかが、まず問題となる。もしわれわれが、資本にとって危機的な年であった1919年時代にはどのような気分が支配的であったかを想い、そのなかに身を置いて、それからその当時の諸階級、諸党派、国家権力等のムードを、今日のそうした現れと比較してみるならば、ブルジョアジーは今日においては……1919年におけるよりもなおいっそう強力になっているとみずから感じている。そうわれわれは確言できる……。」¹⁵⁾

トロツキーは続いて、ドイツにおける1921年の情況は同様に1918年とはまったく異なっていると述べ、共産主義者は壁に突き当たって身動きならぬ有様だと断定し、この規定に基づいて3月行動はいわばまったく革命的情勢の存しないところにおいて起きた（ないしは起された）事件だという結論を導きだしている。

これらレヴィ、トロツキーらの主張が正しいかどうかは、1921年3月における諸情勢の詳細な分析を必要とする。とまれ第三インタナショナル第三回大会およびドイツ共産党第7回大会はこの仕事を緻密に行ない、3月行動に最終的には肯定的な評価を与えた。1922年中にはドイツ共産党は3月行動敗北の打撃から立ちなおり、1923年秋の大昂揚に向って進む。

6

この簡略な概観によっても、時代区分なるものは、歴史家の実践にとってきわめて重要であると同時に、はなはだしく困難な事業であることが理解されよう。

とくにこの小論でとりあげた1921年3月行動を含む時期について、レーニンがつぎのように「狐狩りについて……」のなかで叙述していることは、時代区分を行なうにあたって歴史家または政治家がいかに慎重でなければならぬかを、示唆している。

11) Ebenda, S. 14.

12) Ebenda, S. 25.

13) Ebenda, S. 29.

14) Ebenda.

15) Protokoll des III. Kongresses der Kommunistischen Internationale, Verlag der KI, (Hamburg), 1921, S. 49.

「……もしもヨーロッパの共産主義者が、1921年および1922年の初めにヨーロッパとアメリカの多くの資本主義国が経たような革命的戦闘のとくに激化した時期と時期との中間期（それはおそらく、きわめて短いものであろうが）を利用して、……。」¹⁶⁾（圈点 J. U.）

「時期と時期との中間期」はドイツ語訳では、die Zeitspanne zwischen den Perioden¹⁷⁾であって直訳すれば、「諸々の時期たちの間の短い時間」となる。

この一文をそのまま理解すれば、1921年から1922年の始めにかけて、複数の時期が存在し、しかもその諸時期の間にはまたある異質の、ないしは少なくともニュアンスの違った Zeitspanne¹⁸⁾〔間隔、暫時〕があったということになるし、それはドイツ労働運動史についてみても、一つ一つのひだをたどってゆけば、歴史的事実に合致する。

7

このようにこまかく見てゆけば、すでに短い時間に過ぎない1921年から翌年始めにかけていくつかの時期があり、またそれらの中間に「暫時」が存在したのであるが、より大ざかみにすれば、既述のように1918年終りから1923年秋までを、一つの時期として把握することができる。

このことは経済的諸変動の面からも、確認しうる。クチンスキ教授は大著『資本主義下の労働者の状態史』第5巻において、ドイツにおける生産諸関係が戦争と11月革命にもかかわらず、従前のままにとどまったことを述べ、同時に、戦後の諸時期を「戦後危機、相対的安定、循環的過剰生産恐慌、……」¹⁹⁾と区分している。いまここでは教授の掲げている設得的な表を示すことは省略して、同書第1部第1章『ワイマル共和国におけるドイツの経済構造』の参照をお願いし、ただ第2部第3章『労働組合組織およびストライキ』²⁰⁾に示されたいくつかの表をつぎのように簡約して、本論を終ることとしたい。

年	自由労働組合員数 ²¹⁾ (千人)	ストライキ数	同ーストライキに同時に 参加した最高数 (千人)	ストライキ参加者数 (平均)
1913	2574	—	—	3.7 百万人
1918	1665	—	—	
1919	5479	4581	4469	
1920	7890	8101	8101	
1921	7568	4890	1991	
1922	7895	4945	2176	
1923	7138	2093	1925	
1924	4618	1973	1618	0.7 ²²⁾
1925	4156	1766	758	

(1972年10月14日)

16) レーニン、全集、33、「政論家の覚え書」、207 ページ。

17) Lenin, Werke, Bd, 33, S. 194.

18) Zeitspanne はもちろん単数であるし、レーニン全集（ロシア語）、第5版では Промежутка между периодами (стр. 421) も単数生格となっているが、この生格は時間、容積、数量に関係してその部分的なものを示すいわゆる部分生格であって、「いくつかある中間期の一つ」という意味に解されるので（竹田正直助教授の解明による）、内容的にはこの中間期をあえて単数に理解する必要はない。

19) Kuczynski, Jürgen, Die Geschichte der Lage der Arbeiter unter dem Kapitalismus, Bd. 5, Berlin 1966, S. 3.

20) Ebenda, S. 234 ff.

21) 主として社会民主党の影響下にあった ADGB などの労働組合を指す。Ebenda, S. 243.

22) 1924～1929 年の平均、Ebenda, S. 245.